



かなであん

249-0002 逗子市山の根1-7-24

Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

<http://kanadean.net>

mail: ryukeiji@kanadean.net

お念仏の法縁・離郷門徒

「地方の時代」という言葉が聞かれるようになり、政治、経済、文化面でも、一見「地方」が顧みられているようですが、地方の集落の弱体、過疎化は加速度を増すばかりというのが現実です。先日も「うちのお寺 住職いない」という見出しが一面にありました（朝日新聞・10/11）

全国の仏教系寺院は約7万6千あり、その8割にあたる主要10派が把握している現状では、お寺が消滅する、住職が兼務、無住、高齢の今の住職が亡くなったら後継者がいないという寺院が2割以上になっているといえます。これはお寺だけの問題ではありません。高齢化、非婚化、過疎化、核家族化、都市への人口流出など、今日日本が抱えている諸問題を象徴していると言えます。また一方では一極集中の首都圏にも問題が生まれています。

* * *

浄土真宗の平等のみ教えは農漁村を中心に広まり仏教最大の教団となりました。親鸞聖人の説かれたお念仏のみ教えは、本来先祖の霊やお墓を護るという教えではなく、お寺は御同行御同朋として共々にお聴聞するお念仏の道場として開かれたものでした。

浄土真宗の盛んな地域には各集落ごとにお寺があります。新幹線

の車窓から見える滋賀県や広島のように、次から次へとお寺の屋根が見えるのは浄土真宗が盛んであった土地柄なのです。それらのお寺が生まれたのは、本山や別院、僧侶が主導をとって建てられたものではありません。まずお念仏のみ教えに生きる仲間、御同行御同朋がいて、その願いによって建立されたものなのです。

* * *

私は北海道のお寺の三世として生まれましたが、その自坊も、先に浄土真宗の盛んな地方から入植されたお念仏を抛りどころに日暮しに励む人たちの願いから生まれた道場で、最初に勤められたのはご先祖の供養ではなく、親鸞聖人報恩講でした。今は過疎化が進む故郷にある本堂は開拓の苦労の中で建てられたものです。

その後、カナダの本願寺にも奉職させていただきました。そこも、日本から遥か遠く太平洋を渡ってお念仏のみ教えと共に新天地を求めて移民された人々によって建てられたお寺でした。仕事を心得るのに有利なキリスト教への改宗の誘いにも、「母親の胎内にいた時からの仏教徒だ。必ず同じお浄土への道が約束されてあるお念仏のみ教えこそが抛りどころであり自分の信心だ。離れているからこそ確信する」という篤い思いから今に至っています。それは、カナダで生まれ育ち言葉は、

英語になっても、自分の血であり歴史だと彼らは言います。その経験は、開教寺院でお育てを受けた私に、浄土真宗が「伝道教団」であるという思いを益々強くさせ、帰国後、首都圏で浄土真宗のお寺を求める声に添って布教所を開設しました。それから25年、過疎化の波の中でお念仏のみ教えを守り伝えて下さる故郷の自坊と、逗子の布教所を行き来しながら勤めさせていただいています。

日本の中枢である首都圏には何もかもが揃っているようですが、宗教においては最も開教を必要とする地域です。そこには故郷を離れたご門徒も大勢おられますが、それらご門徒の皆さまも私たち僧侶も、共々に離郷を離れた門徒であり、その故郷でお念仏のお育てをいただいた仲間であることは心強く、ありがたく思わずにはおれません。

海の内外のへだてなく

み仏（みおや）の徳の尊さを

我が同胞（はらから）に

伝えつつ 浄土（みくに）

の旅をとともにせん

み教えはどこにも隔てなくいき届いてくれています。親鸞聖人のみ教えには「無縁」という言葉はそれこそ無縁です。どこで人生を送ることになっても、必ずみ教えが至り届いています。そしてお念仏に生きる法縁の朋がいます。

合掌

奏庵法座

日時
10月26日(月)
午前11時より
「真宗宗歌」
正信偈
法話
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとき

気がつけば暗くなっている「秋の陽のつるべ落とし」の言葉通りです。近年日本で流行りのハロウィンが北米ではちょうどサマータイムが終わる日です。きのうは明るかった同じ時間が今日は真っ暗…。家々の玄関に飾られたカボチャのお化けのランタンの灯が急に冷たくなった秋風に揺れていた独特な雰囲気を出します。毎年巡ってくる宗教行事に季節感は重要な要素です。今月のお参りの季節感はどうでしょう。いい季節です。どうぞお参り下さい。



お礼

住職入院には、お見舞いや優しいお言葉お心遣いをいただき、ありがとうございます。紙面を借りて心より御礼申し上げます。

おかげさまで化学治療が順調に進み、当初の痛みや苦しさ、不安も解消されつつあり、医学の進歩、医療に携わる人々の献身や不安を与えない揺るぎない態度に接する貴重な経験を充分「堪能」しながら治療の日々を過ごしています。「癌」は、外からくるものではない、誰もが元々自分の中にもっている細胞が異常をきたして増殖するもの、自分そのものだから治療が難しいのだと知りました。「叩いてなくなるものではなく抑えながら共存するもの」「もっといい治療はないのか…と、藁をも掴みたくなるかもしれないが藁ではいけない。しっかりした大木を…」、医師の言葉に、生きている限り消えることのない人間の煩悩を思います。自分に起きた病も、煩悩と同じく抱えたまま、いのち終えるまで生かさせていただくしかありません。すべてはお任せです。後悔のない抛りどころを何に求めるのか…、親鸞聖人の仰せは何事にも通ずる普遍のみ教えだをつくづく感じています。皆さまにもどうぞ呉々もご自愛下さい。

編集後記

住職とのメールより。■9/25、入院。今消灯、眠剤もらってこれから寝ます。9/27、肺の水を抜くそうです。ちょっと楽になるかも…？9/28、今朝、左脇のリンパの細胞を採りました。髭も剃るように指示があり、善祐(甥・癌の先輩)に聞いた通り、どうせ抜けるそうですから。薬攻撃です。ほぼ、というより悪性リンパ腫に間違いはないということです。腫瘍はけっこう大きい。いい報告じゃないですね、と言うと、そうでもないですよ、80パーセントは治りますから、と。おやすみ…。■10/1、朝から下腹部のエコー、集中豪雨のように抗がん剤投与を首の血管からします。喉のためにも良いとの説明。ここでの処置は大きいほど早く済む。薬の説明とか細かいことほど長い。10/4、先週のことを嘘みたいな穏やかな日曜の病棟です。先ほど食事の前に少し寝てたようです。何とかしてます。安心していいよ。腹が減り食欲は戻りました。喉の調子も食べるには問題ないと思える。声はまだですが、確実に楽になっています。■バンクーバーの親友リチャード(人工透析で生命を繋いでいる)より。10/7、ご気分は？今人工透析を終えて帰ってきた。今日の気温は16度。今日も快晴で清々しい。でも正味5時間の透析はきついな…。生きるためには仕方がないね…？何故こうまでして生きなければならぬのかね？まだ何かし残してる事があるのかな～？10/8、リチャード宛。秋になってきた。闘病という字がやっと解ってきた。闘いに暇はない。日々が戦場。たまの休戦は束の間。(延々続く宗教談義は省く)関わってくれている全て、善悪を超えて念仏者に育ててくれる友達(善知識)を思っている。だから浄土へは一緒に往こう。■10/11、今日からご飯が出た。噛んでいるだけで元気になるような気がしてくる。食べると汗かくなあ。10/14今後の方針が決まった。先生が来て、来週の月曜日にもう一度抗がん剤投与、その経過を見ながら、来週中に退院して、自宅療養通院にしましょう…。■シャバが近くなってきている。(Y)